



「自分だけ」の辞書作りを ——自分で引いて、読んで、色付けする



松井 典子

私の高校生時代とは異なり、今はデジタルが流行の最先端で、大方の生徒には電子辞書の方が好まれる。生徒にとって紙辞書は「持ち運びに重し、鞆や机で場所をとる」「目的の単語や熟語を調べるのに手間と時間がかかって面倒くさい」ということだ。それでも紙辞書の方が英語学習にとってはよいと考えるのは、やはり、一覧性に優れているということと、印をつけるという能動的な作業をすることによって記憶に残しやすいということがあると思われるからだ。

1. 紙辞書の購入

本校では、1年生の入学時に紙辞書を購入させ指導をしている。どの辞書にするかはその学年によって多少異なるが、私自身が担当した年には、生徒のレベルにあっていることと使いやすさから、『プラクティカル ジーニアス』一本に絞るようになった。生徒全員が同じ辞書だと授業での指導が大変しやすく、生徒同士で助け合うこともできて効率がよいからだ。

2. 自分だけの辞書作り

新入学時には、『プラクティカル』の別冊付録や活用問題集を使って教えるが、私の場合はその後も3年間必ず毎時間辞書を一緒に引く機会を設けている。少ない日は1, 2回だが、5, 6回引かせる日も多い。1年生の最初は誰でも高校生になったという自覚と新鮮さから教師の言うことをよく聞くので、辞書指導の絶好の機会である。まずは、基本的な辞書の引き方を一通り教えた後、

教材に出てくる語句で重要な所には、自分の好きな色の色鉛筆で印をつけるように指示をしている。色をつけることによって、「ただの辞書」がどんどん「私だけの辞書」になっていく。意味や綴りや例文を忘れたとしても、また次に引いた時に「前にもこの語を調べたんだな」ということが認識できるし、学年が進めば同じ項を見ても理解度や内容の吸収の度合いが違ってくると思う。

3. 一緒に引く

とにかく授業において、一緒に辞書を引くことが大事である。電子辞書しか持ってこない生徒にかぎって電子辞書も使いこなせず、目的の単語や熟語、そしてそれを使った例文が探せないのが実情である。紙辞書ならば簡単に探せるものが、電子辞書だと一覧性がないために見つからないのである。やはり、3年間授業中に辞書を頻繁に活用することが大切であると思う。

4. 本義と図によるイメージ作りとインデックス

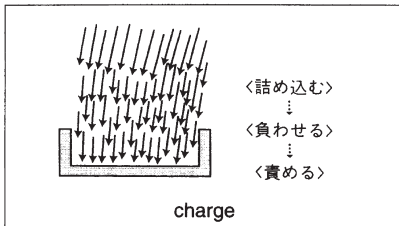
日本語の訳語に頼らず、まずその語の持つイメージを自分の中にしっかりと取り込むことが大切である。日本語にすると同じ「すべての」になる all と every の違いは、それぞれの項の最初の図を見比べれば一目瞭然である。生徒にとって紛らわしい shade と shadow, clean と clear も最初に図解を見ておけば、後で間違えることはない。

その他にも charge という単語の図解は、訳語の展開にも結びつけられていて、とても参考になる。発音記号の隣に本義・原義の欄があれば、そ

***charge** /tʃɑːrʒ/ 〔原義「車に荷を積む」から「支払い・責任などの」負担を負わせる〕. cf. car, carry, chariot

index

- ④ ④ 1 請求する 2 つける 3 ゆだねる
4 指令する 5 責める 6 充電する
④ 1 支払いを請求する 3 充電される
④ 1 料金 3 責任 6 非難



の語の持つ根本の意味やイメージを確認させることができる。さらに図があればそれを参照し、この語の持つイメージを把握させることもできる。そしてインデックス欄を活用し、具体的にどこを見ればその意味が見つかるかを教える。さらにその単語や熟語・構文が使われている用例を読み、一緒に使われる前置詞や接続詞を確認しながらinputする。

5. 用例中の太字

『プラクティカル』の場合、頻繁に使われる表現は太字で書かれているので、教科書や演習問題の本文中にその表現がそのまま出てくることも少なくない。

***sta-tis-tics** /statistiks/ ④ 1 [複数扱い] 統計(の数字) ② the recent divorce statistics 最近の離婚の統計 / **Statistics suggest that** the population of this town will be doubled in five years. 統計から推測すると、この町の人口は5年で2倍になるだろう。 ④ ④ ④ 「統計によれば」は according to statistics / Statistics show that ... などともいい、一般的に言う場合にはいずれも無冠詞。 2 ④ [単数扱い] 統計学[論]。

これを見れば、長文の教材の中の Statistics suggest that ... は「統計から推測すると…」というように日本語らしく和訳できるし、英文の意味もすんなり理解できる。また、その後に続く語法にも言及すれば、別の表現についても、生徒の頭の中を整理させることができる。

sense の場合も、太字にはなっていないが、

Man has five senses—sight, hearing, smell, taste and touch. の用例は、演習用の長文問題の中でもそのまま使われている。sense の訳語だけを確認するよりも、この用例ごと input する方がはるかに記憶に残りやすく実用的である。

6. 文法・語法と日英比較

3年生になると、生徒の方でも文法の面で比較できるようになってくる。「…であることを願う」という日本語に対し、I hope と I wish のどちらを使うのかという疑問に対し、hope の項を引かせると、そこに明確な答えが出ている。

また、我々が日常的に使っている「挑戦する」の場合も、challenge と try のどちらを使うかについて、その違いが日英比較の項目にきちんと説明されている。

7. word surfing

逆に、日本語のイメージは異なるが、英語では同じ word や phrase を使うこともある。stain (しみ) が「汚点、きず」の意味でも使え、さらに Will the coffee stain come off? の例文から、しみが「取れる」のは come off であり、button (ボタン) を引かせれば、ボタンがぼろっと取れる場合にも The top button has come off my blouse. の例文にあるように come off が使われることがわかるのである。つまり、同じ日本語の「取れる」という表現が、「消える」イメージでも物理的に「落ちる」イメージでも come off で表せることがわかる。

生徒は、自分の身の回りで起こっていることや状態について、「英語ではなんというのだろうか?」という関心を持っている。教える側が、辞書を引くことによっていろんな発見ができるのだということを教えてあげることが大切だと思う。

(まつい のりこ・愛知県立豊橋南高等学校教諭)